徳島県・神山町グリーンバレー視察（後編）

議員　青　沼　進　二

グリーンバレーのそもそもは戦前、アメリカから平和の使者として贈られたアリスの人形を里帰りさせようと'91に始まったのが発端。PTAの役員として大南氏は活動に関わり渡米した。

翌年、国際交流協会を設立し、'97には県の進める長期計画の中で国際文化村プロジェクトの地域に指定された。ここで大事なのは県や国や事業をただ受入れるのではなく、町民自ら文化村委員会を立上げ、自分たちに必要なものを逆提案したことである。

'98にはアメリカのアドプト・ア・ハイウェイの制度を取入れ、着手。これは公共施設の一定区域を引取って代わりに管理するというもの。法解釈上、難しいという県の意見を無視して実力行使し、後に認められたという案件。

で、'04にNPO法人グリーンバレーを立上げ、様々な活動が胎動した。アートによるまちづくりは「神山アーティスト・イン・レジデンス」と称する事業。これは芸術家（日本人1名、外国人2名）を招いてその制作を支援するもの。作品の展示を通じての交流や町内にパブリックアートが点在し文化性を高めている。

「ワーク・イン・レジデンス」は空き家の持主がどういう人に住んでもらいたいか、働き手や起業家を募集し、審査して使ってもらおうというもの。その結果、現在、パン屋、レストラン、歯科医院などちょっとオシャレな建物が目につく。IT関連のサテライトオフィス、本社移転は10社に及んでいる。

この他に国の求職支援制度を活用した人材育成事業の「神山塾」がある。これはグリーンバレーで半年間、山村での働き方を教えるもので、塾生は全国から若者が集まり、ホームステイをして学ぶ。この間、地域の生活にふれ、その良さを知り、就職したり、カップル誕生となったりして定住した人たちが増えたという。

こうやって概観すると最初から目標がはっきりしていたわけではなく、進めていくうちに徐々に方向性が見えて目標が定まったという感じがする。キーワードは古民家を活用した「田舎ぐらし」、「国際化」それと「芸術、文化の創造」といったことになるか。これによって人口が増え、活気を取戻し、他に類のない魅力的な町が出来つつあると言えそうだ。

神山町は日本のどこにでもあるなんの変哲もないごくごく普通の過疎の町である。それ

が一躍、全国の町村の注目を集めることになったのは人の持つパワーである。一人の人の情熱が人が人を呼び、人と人との縁でさらなる飛躍につながり、大きなうねりとなって好循環し形成されてきた。まさに人こそすべて！その典型を見た！ そのような感想を持った次第である。

高知県・黒潮町津波対策視察

議員　戸　田　邦　市

最大津波高31メートルが来襲すると想定されている当村だが、いち早く取り組んだと評判のところを視察してきた。

黒潮町は高知県の西南に位置する、人口11,300人余り、カツオ漁の盛んな美しい海岸線を持つ、静かな田舎町が、突然日本中の注目を浴びることになった。2012年3月に内閣府が発表した、南海トラフの巨大地震による最大震度7、最大津波高34メートル、人的被害2,300人、建物被害6,300棟、町内61集落中40集落津波被害、という驚くべき内容だったが、町の取り組みは素早かった。先ず、町長が全職員に対し訓示を行っている。

1. 住民に過度の不安を与えるな。
2. 正しく理解し、今後の行動、発言は課題解決に向けたものとする。
3. 「町全体」の危機的状況ととらえよ。
4. 困難な道のりになるが、職員一同の奮起を要請する。

ここで特筆すべきは町は直ちに61集落すべてに町職員を配置して、区長・班長を中心に集落ごとに問題を集約、地域住民との話し合い等懇談会は、2年余りで実に431回にも及んだ。他に防災教育・研修、防災訓練、現地調査など町と住民との活動量は驚くべき数字である。特に注目すべきは、『暗闇時高台避難の誘導に関する実験』を実施していることで、大規模災害時に街灯などあらゆる照明が不灯となることを想定、暗闇での避難行動の課題、日中にため込んだ光を発光する高性能「蓄光材」を使用した避難誘導材の効果の確認などは、今後当村でも検討の余地ありと思う。最後に『あきらめない。揺れたら逃げる。より速く・より安全なところへ』を合言葉に全住民と真摯に取り組んだ黒潮町の姿勢は災害国日本のすべての都道府県市区町村が規範にすべきである。